

B-54 色物の洗たくに於ける蛍光増白剤の影響 (才工報)

ライオン家研　〇谷直子　宮本静枝　田中良平　鈴木益太郎　近藤邦成

目的　前報では、官能評価に於ける標準光源の作成について検討を行なったが、本報では、機器を用いて自然光との一貫性について検討を行なった。

方法　光電式反射度光度計 ELREPHO (西ドイツ、カールツァイス社製) を用い、標準の光 A, C, D₆₀₀₀ で、それぞれの試布を測色した。測色値は、同一条件で処理された布 5 枚の平均をとった。前報同様、色度点を求め、処理布の原布からの色ずれの大きさ、方向などを、測色条件間で比較すると共に、前報の標準色票との色合わせによる結果とも比較した。

結果　光源 A の場合、各試布について、原布、処理布の差が色度点上に現われない。光源 C の場合には、色度点上でやや差が現われるが、その色ずれの大きさは、前報の人工光源①の条件に似ている。当然のことながら、紫外線を含む光源である D₆₀₀₀ は、原布、及び処理布間の差が最も大きく現われ、色度図上での色ずれの方向、大きさなどは、人工光源③と似ている。従って、やや蛍光剤による効果が大きく出すぎる傾向があるが、変退色の大きさを見るのには、ここで使用した 3 種光源のうち、D₆₀₀₀ で測色を行うのが最も適当であるといえる。ただし、前報の人工光源や、自然光の下での色合わせによるものとは、やや異なる色度点を与えるので、条件付きで測定すれば良いが、色物の色味の違いを考察するには適当でなく、それらの目的には、前報の人工光源が好ましい。